

YAU

2025年
咖啡館



2025.4 - 2026.3

YAU 2025.4-2026.3

2025年度の報告書

INDEX

02 ABOUT YAU

04 NEW PROJECTS

「まちなか」での新たな営みは

06 PROJECTS

大丸有で動き続けるアートプロジェクト

08 BUSINESS

ビジネスシーンとの共創プロジェクトも進行中

10 LEARNING

アートと社会を共に学ぶ場

12 YAU DAILY 2025

- ・TALK01 有楽町の日常から、アートと街の循環が生まれるには
- ・TALK02 街に開かれる「YAU CENTER ぜにがめ」の試み
- ・TALK03 「YAU LEARNING」は、学び合いの渦?

16 DATA

数字で見るYAU

17 POSTS

「YAU ユーザー」たちから

18 YAU HISTORY

タイムライン2022-2026

19 INFORMATION

ABOUT YAU

ひらかれた創造が、都市を動かす——「YAU (ヤウ/Yurakucho Art Urbanism)」は、2022年2月よりスタートした、アートを軸にしたイノベーション創出のプラットフォームです。

「アーバニズム」は都市生活そのものと、まちづくりの実践のこと。そして「アートアーバニズム」は、街の“使い手”と“つくり手”にアートが浸透することを表現した言葉です。

舞台となるのは、日本有数のビジネス街である大手町・丸の内・有楽町の「大丸有」エリア。そこに集う、ビジネスパーソン、アーティスト、企業、自治体、来街者といったすべての方々にとっての創造的なシーンとなることを目指しています。

[主催]

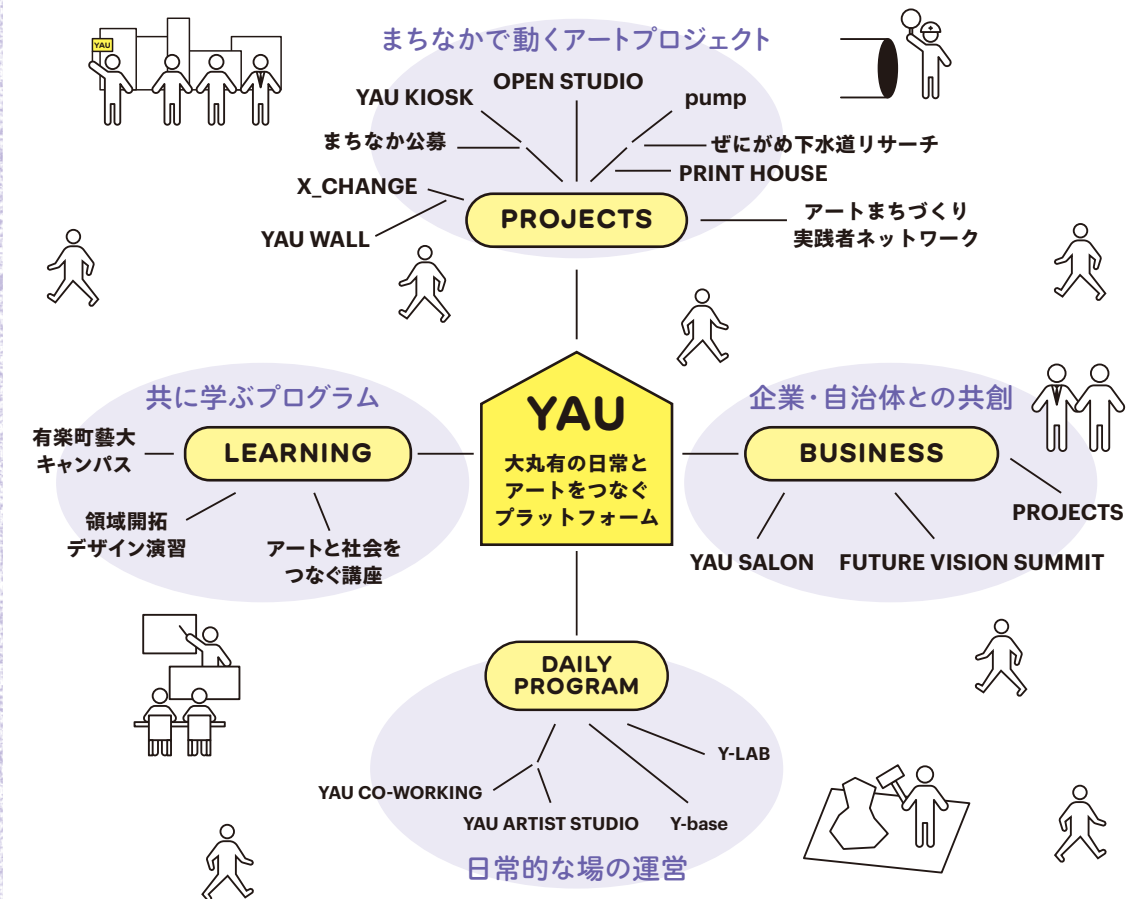
「有楽町アートアーバニズム」実行委員会

(NPO 法人大丸有エリアマネジメント協会、一般社団法人 大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会、三菱地所株式会社)

[共催]

東京都 (一部プログラムを実行委員会との共同事業として実施)

YAUの見取り図 2025年度版



PLACE

YAUは、都市の日常におけるひとつのハブ。<YAUを経由して、街へ外へ出て実践し、また戻ってくる>そんな循環の拠点として機能しています。主な活動場所には有楽町・北有楽ビルの「YAU STUDIO」と大手町エリアの「YAU CENTER ぜにがめ」の二つがあります。



YAU STUDIO



YAU CENTER ぜにがめ

NEW PROJECTS

「まちなか」での新たな営みは

北有楽ビルに拠点を移した今年度、自主企画においても、公募企画においても街なかで実施するプロジェクトに力をいれました。大丸有の街なかでのYAUの新たな試みを紹介します。

YAU KIOSK

2025/9月 -



デザイン: 永尾仁

大丸有の日常に出現する「屋台型」スタジオとは？

9月からスタートした「YAU KIOSK」は、屋台のように移動でき、本屋、ワークショップ会場、相談所、休憩所……とコンテンツに合わせて形状を変えられる移動型プログラム。“未知なる感性に街なかで出会える拠点”としてスタートしました。第一弾の『^{きわみや}極屋』はアーティスト・コレクティブGC magazineによる、「額装写真の自販機」。来場者が撮影した写真をわずか2分で加工・プリント・額装し、作品として“排出”するコンテンツです。第二弾は、短歌を詠むダンサー・振付家の涌田悠による、短歌とからだを使って有楽町の風景に触れる「体験型街歩き」の拠点として活用。第三弾は、YAU ARTIST STUDIOにも滞在していた高井爽による『半展開トラッピング』を、OPEN STUDIOの会期中に実施しました。YAU KIOSK本体を展覧会会場とし、大丸有の街なかで移動と滞在、そして対話を繰り返しました。

vol.1
GC magazine『^{きわみや}極屋』
@丸ビル (2025/9月)



自販機から一瞬で出てくる、写真作品

vol.2
涌田悠 体験型街歩き『からだ短歌で巡る! 有楽町ミニツアー』
@有楽町ブック・ウォーク (2025/11月)



有楽町を巡る、ミニツアー+パフォーマンス

vol.3
高井爽『半展開トラッピング』
@大丸有の各所 (2026/3月)



街で出会う「移動型の展覧会」

YAU まちなか公募

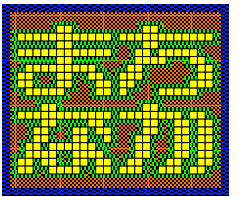
募集: 2025/8月 - 9月 発表: 2025/12月 - 2026/3月

都市空間の過ごし方をひらく、異なる二つの試み

街中に設置された公衆電話の受話器をとると、誰かの“日常の違和感”が聞こえてくる。街頭をいけば、編み棒と毛糸をもった集団が編み物をしている——そんな二つのプロジェクトは、新しい「YAU まちなか公募」の企画から。大丸有エリアの公共空間を舞台に、都市空間の豊かな可能性を開くような営みです。

ひとつめの『違和感預かり所』は3人組の「全人類問い持ちプロジェクト」が運営する作品。日常の些細な「違和感」

を誰かに預け、応答し合う装置は、正解や効率が重視されるビジネス街において「わからなさ」や「問い」を入口にした対話を誘発しました。つづく《都市を編み直す》は、TALK NONSENSEとい



デザイン: 三重野龍

う二人のチームによる3ヶ月連続企画。編み物がもつ仕事の歴史や生産プロセス、身体性のリサーチを通じて、都市生活を見つめる展示やワークショップを行いました。

vol.1 全人類問い持ちプロジェクト 『違和感預かり所』

(FUTURE VISION SUMMIT 2025 出展)
@Slit Park YURAKUCHO (2025/12月)



3人組の「問い持ち」は『違和感預かり所』のひとつの機能としての来場者との対話を繰り返した

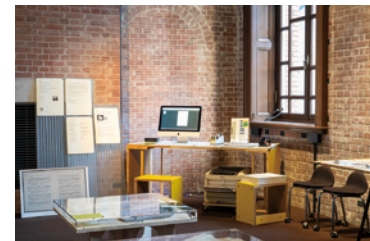


有楽町のSlit Park YURAKUCHOの展示には、お昼時のワーカーも数多く訪れた

vol.2
TALK NONSENSE《都市を編み直す》
2026/1月: Knits & Review / COPYROOM
@三菱一号館美術館 Espace 1894
2026/2月: WORKSHOP U-A-R-K / 解いて編んで @YAU STUDIO
2026/3月: Public Knitting Day & Knits & Review / COPYROOM @有楽町のまちなか



編み図のリサーチを起点とした三菱一号館美術館 Espace 1894での展示、二人が普段から行う「セーターの解体」、そして街角での編み物ワークショップを行った



PROJECTS

大丸有で動き続けるアートプロジェクト

ジャンルの垣根をこえたアーティストやクリエイターの集うYAUでは、様々なアートプロジェクトを展開。毎年定期的に行うイベントや、新展開となるリサーチプロジェクトなどが進行中です。



2026/3月13日 - 15日

YAU OPEN STUDIO '26

街とスタジオとぜにがめを行き交う3日間

毎年度の集大成として実施されるOPEN STUDIOは、YAU STUDIOと、YAU CENTERぜにがめ、そして大丸有の街なかで開催。本冊子で紹介している「YAU まちなか公募」や「YAU KIOSK」、そして「ぜにがめ下水道リサーチ」などを公開し、それらをめぐる「まち歩きツアー」も行われました。各地のまちづくり団体による公開会議、アートと都市のあり方を考えるトークイベントなども活況に。5年目となるYAUの「アートアーバニズム」の現在地を総覧する3日間となりました。

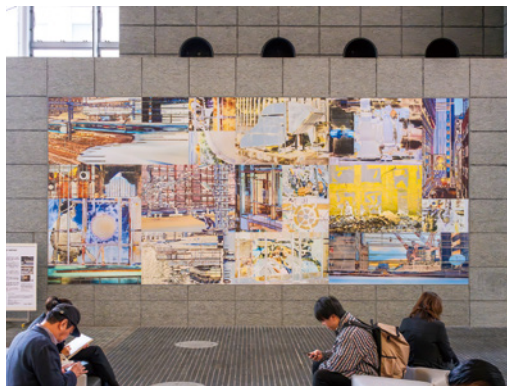


X_CHANGE / YAU WALL

2025/10月 - 2026/1月

変化し続ける都市の「流動性」を可視化する

海外アーティストの短期レジデンスプログラムである「X_CHANGE」の第3弾では、フランス人アーティストのジャン＝ヴァンサン・シモネ (JEAN-VINCENT SIMONET) を招聘。10日間の滞在で、有楽町エリアで解体作業中の建物内部と、閉鎖されたKK線 (旧東京高速道路) で撮影を実施、その写真を素材に巨大な壁画を制作。移ろいゆく東京の姿を動的なイメージで描き出しました。都市空間を展示壁に変える「YAU WALL」の第一弾として、丸の内オアゾの〇〇広場での展示も。



ジャン＝ヴァンサン・シモネによる『Deep peeling』の展示

ぜにがめ下水道リサーチ

2025/10月 -

東京の下水道を探って見えたこととは

10月に始まった新拠点、YAU CENTER ぜにがめで継続しているリサーチプロジェクト。東京都下水道局との連携企画で、アーティストや編集者などの多様なメンバーからなるチームが下水道システムへのリサーチを重ねています。OPEN STUDIO に合わせて行われた成果発表展

「Holes vol.01」では「観る / Observe」をテーマに、下水道リサーチを通じた個々の考察を写真やテキストといったかたちでプレゼンテーション。さらにアーティスト・石橋友也による、下水道処理過程の微生物を扱った映像を含めたインスタレーションを展示しました。

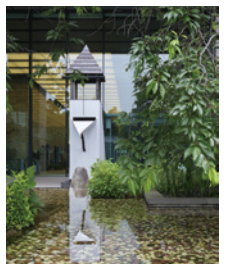


野良展示0.0 - MOHITORI パビリオン -

2025/5月 - 6月

大手町の広場に現れた、野生の知性を宿す「展望所」

京都のヴィラ九条山とYAUとのパートナーシッププログラムとして行われた、フランス人建築家ノエル・ピカペール (Noël Picaper) のプロジェクト。ヴィラ九条山に昨年滞在したのち、YAUのサポートのもと東京でリサーチを行った作家は、伝統技法「焼杉」から、日本の建築と火の関係性を考察。大手町のホトリア広場に、野生的な「野良」の感覚を持ち込むパビリオンを出現させました。建築物は「見晴らしのいい展望所」として開放され、来街者に都市への新たな視点をもたらす展示に。合理性だけでなく都市のあり方を問い直す、対話の場を育みしました。



ノエル・ピカペールの『MOHITORI パビリオン』

パビリオンは時期ごとに下記の場所に移設されました。

ホトリア広場 (2025年5月30日 - 6月15日) / 東京日仏学院 (2025年7月1日 - 10月25日) ※東京日仏学院主催「第11回「哲学の夕べ」— Agir pour le vivant」の一環として展示。蓮溪芳仁氏による儀式の中で披露されました。 / 大手町川端緑道 (2025年10月27日 - 11月28日) ※YAUおよび東京藝術大学による実験の一環として実施
なお、このプロジェクトは、ヴィラ九条山のポスト・レジデンス・プログラムとして実施されており、アンスティチュ・フランスパリ本部、アンスティチュ・フランス、ベタンクールシュエーラー財団の支援を受けています。展示に際しては東京藝術大学共催。

BUSINESS

ビジネスシーンとの 共創プロジェクトも進行中

アートの現場を知るマネージャーやアーティストのリソースを活かした、企画開発やコーディネート、ワークショップ——。「YAU for BUSINESS」として、企業や自治体との協業プロジェクトを多数行っています。

FUTURE VISION SUMMIT

2025年12月9日 - 10日



キービジュアルデザイン: LABORATORIES



丸ビルの2フロアにおいて、カンファレンスやトークセッション、展示とワークショップを展開。さらに三菱ビルコンファレンススクエア M+ で東京藝大との展示『世界の心地よい生き方、働き方展』を行った



諸領域のプレイヤーが集う都市型カンファレンス

ビジネス、テクノロジー、アカデミア、アートの領域が交わる都市型カンファレンスイベントは、昨年続く2回目の開催。正解の見えない現代において、既存の価値観に問いを投げかけるプレイヤーたちの「未来への視座」を交差させ、新たな気づきを生み出すことを目指したセッションが続々展開されました。アート、ビジネス、エンジニアリングといった各界のリーダーが登壇する大型カンファレンスや、登壇者を囲むかたちのトークセッション。また、アーティストのリサーチ手法にフォーカスした展示プロジェクト

「SHOWCASE」や、種々のワークショップを実施。そして三菱地所と東京藝術大学による企画公募事業「I LOVE YOU」プロジェクトによる『世界の心地よい生き方、働き方展』では、世界の先進事例のリサーチを通じ、アートが都市の持続的な成長や個人のウェルビーイングに寄与する新たな可能性を提示。ビジネスとアートの相互関係を超越して共にビジョンを構想するような、実践的なフォーラムとなりました。



《Patch Work》©Emma Jurczynski

YAU SALON

アートとビジネスを 行き来しながら考える トークシリーズ

「都市とアート」を入り口に、ビジネスとアートの領域で活動する実践者をゲストに開催している、トークセッションシリーズ。今年度はアーティストの制作プロセスをスタートアップの視点から考えるトーク、「マイナビアートスクエア」の企業担当者を招いてのアートにまつわる「キャリア」を考えるトーク、東京藝大出身者を中心としたスタートアップ企業を招いたトークに加え、スタートアップとアートのトッププレイヤーが顔を揃えた番外編を実施。アーティストと起業家の親和性を軸に、アート×ビジネスの一断面を掘り下げました。



vol.34

『思考のはじまりとカタチになるまで』
ゲスト: 南条嘉毅 (美術家)、鶴岡優子 (寺田倉庫広報グループリーダー)
8/27@Tokyo Innovation Base



vol.36

『芸術家たちが仕掛ける、「芸術的な社会」の未来』
ゲスト: 宇津木安来 (アートチューンズ CEO / 日本舞踏家・日本舞踊研究者)、水谷厚太 (同社 COO / 画家・デザイナー)、平田成日 (同社 CSO)
10/22@YAU STUDIO



vol.35

『「キャリア」に効くアート〜マイナビアートスクエアの実践から』
ゲスト: 細野ゆりか (マイナビ)
9/24@YAU STUDIO



番外編

TIB 2nd Anniversary WEEK 連携企画
『アート×スタートアップで加速するイノベーション』
ゲスト: 小池藍 (THE CREATIVE FUND)、田崎有城 (N-ARK / UntroD)、下山明彦 (Senjin Holdings)、笠間健太郎 (アーツ・アンド・プランズ)
11/27@Tokyo Innovation Base

DENSO × YAU 共創アートプロジェクト

対話を通じ、技術と芸術の境界を往復する作品を発表

先進技術を持つ自動車部品メーカーであるデンソーと、アーティスト奥村研太郎による、技術と芸術が交差する実験的プロジェクト。YAUのコーディネートのもと、デンソー東京支社のオフィスを舞台に、技術者・研究者とアーティストが対話を重ねました。デンソーへのリサーチを通じて、エンジニアリングやテクノロジーの背景にある思考や構造への理解を深め、再帰的な機械による計算可能性の外部に立ち現れる「リズム」や「カオス」を映像作品として提示。技術と芸術、企業とアーティストという異なる領域の思考が交差し、新しい視点や問いがどのように立ち上がるかを探る取り組みになりました。



デンソー東京支社での奥村研太郎『On Difference Engines and Waves』展示

LEARNING

アートと社会を共に学ぶ場

YAUでは東京藝術大学との取り組みをはじめ、学びのプログラムを多数実施しています。アーティストやアートの現場に携わる人と共に学ぶ時間は、YAUならではのもの。様々な取り組みを2026年からは「YAU LEARNING」と題して、新講座も交えて広がっていきます。

有楽町藝大キャンパス

藝大生と共にアートの持つ力を知っていく授業プログラム

藝大生と机を並べ、学びの場を共にしていく―、2023年より継続している東京都・東京藝術大学・YAUの三者連携の、社会人向け講座シリーズ。2025年度には、社会学や人類学の視点から調査型アートを学ぶ「アート・リサーチ演習」や、街なかで実際に展示を企画・運営する「展覧会設計演習」、さらに福祉領域との連携講座など、全6講座を開講しました。アーティストや研究者などの講師の

もとで表現に向き合う実践型講座と、様々なゲストを交え最先端の知にふれる講義型講座は、一言では言い表せない個々のアートが持つ精神を、時間をかけて体感・体験する機会でもあります。それは、キャリアの見直しを求める方や、仕事に新たな発想を求める方もふくめ、多様な文脈を持つ人々へ開かれた学び。2026年度も新しい講座を拡張しながら開講中です。



YAU STUDIOや、藝大関連施設、ときには大丸有のまちなかを舞台に講座は展開。期間や規模感も講座によって幅広い



通年開催

アートと社会をつなぐ講座

2026/2月 - 3月(全3回)

YAUの学びの入口

新しく始まったYAU LEARNINGの入門編プログラムです。現代美術史・社会学・哲学・キュレーションといったバックグラウンドを持つ講師3人によるレクチャーを実施。アートと社会の交わりや、「書く」営みと社会のつながり、また実際に展覧会を行う際の試行錯誤など、アートと社会の接点を様々な視点から考察しました。参加者個々人の関心が「アートと共にやりたいこと」へとつながることを目指し、2026年度も新規プログラムを開講予定。



いずれもYAU STUDIOとオンラインで開催。受講者との質疑応答も盛り上がった



山本浩貴
『現代美術史から考える、アートと社会』



福尾匠
『哲学・メタ視点から考える、アートと社会』



熊倉晴子
『キュレーションから考える、アートと社会』

吉本英樹×YAU LEARNING「領域開拓デザイン演習」

2025/
10月31日 - 12月19日(全5回)

エンジニアリングとデザインを背景に多領域へ思考をひろく

東京大学先端科学技術研究センターの吉本英樹を講師に迎えた、多領域との交わりから新たな価値を生み出すための演習プログラム。航空宇宙工学を背景に持ちながらロンドンでデザインを学び、テクノロジーと芸術を高度

に融合させてきたクリエイターである吉本のもと、多彩なゲストを交え「宇宙」「工芸」「経営」「デザイン」といった異なるスケールのテーマを縦断的に扱いました。小規模な研究会や交流会も実施。



YAU DAILY 2025

YAUで普段していること



北有楽ビルのYAU STUDIO

YAUで常時運用中の レギュラープログラム



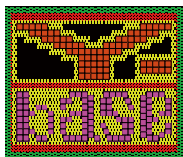
YAU CO-WORKING

ワーカーやアーティスト、アートマネージャーやデザイナーといった方々が集うスペース。フリーデスク制で、個人でクリエイティブな活動や課外活動に上げむ方、オフィスを持たない方などに利用いただいています。交流会などの催しも不定期に実施。YAUの活動を横目に見ながら知恵を共有し、有楽町のアートコミュニティを広げていく拠点となっています。



YAU ARTIST STUDIO

STUDIO内に3つのブースを設置し、アーティストに制作やリサーチの場として開放するプログラムです。街に滞在し試行錯誤するワーク・イン・プログレスのプロセスを可視化することを重視しています。2025年度は17組が利用。オフィスと同居するスタジオならではの環境で、アーティスト同士の交流や実験が続いています。



Y-base

オフィスビルの一角を舞台芸術の稽古場に転用するプロジェクトです。現在は、YAU CENTER ゼにがめを拠点に、ガラス張りの空間で演劇やダンスの稽古、読書会などが行われています。無料で場所を提供する代わりに制作過程をワーカーや街に公開する仕組みをとっています。

TALK 01

有楽町の日常から、アートと街の循環が生まれるには



村松里実 (制作、アートコーディネーター)
スタジオ運営、YAU CO-WORKING 担当



金森千紘 (アートマネージャー)
スタジオ運営、YAU ARTIST STUDIO 担当

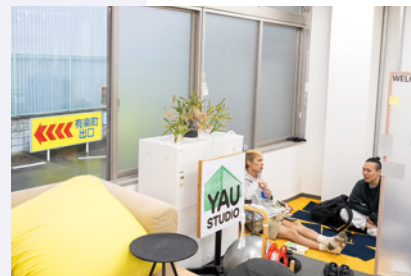


小森あや (アートマネージャー)
スタジオ運営、Y-base、
YAU ARTIST STUDIO 担当

YAUの日常の営みと、北有楽ビルへの移転

— YAU STUDIOは普段どんな活動をしているんでしょうか？

小森: YAUメンバーが集うほか、以前から行っている一般公募型のCO-WORKINGもあり、新しく始まったARTIST STUDIOもその隣でやっています。今年度は北有楽ビルに引っ越して、スペースがコンパクトになったことから、これまでのYAU STUDIOのよさを振り返りながら、スタジオ利用の新しいかたちを探りました。



金森: YAUの活動や目的を改めて考えた年でしたね。街なかでの展開が増えた一方で、スタジオでのプログラムも新たに始めました。ARTIST STUDIOは1ヶ月の利用期間でしたが、場所に慣れるための時間を考慮して、2026年度は2ヶ月に延長しました。また、以前はスタジオ内で運用していたY-baseもYAU CENTER ゼにがめで再始動しました。

— 継続してきたからこそ考えられることも多そうですね。

村松: そうですね。たとえばCO-WORKINGは、はじめは一般のビジネスパーソンを想定していました。だけど実践を重ねる中で、アートマネージャーのように、組織に属さない個人事業主の方たちにこそ、必要とされる場所なのだと気づきました。舞台や展覧会で作り手と場の間をつないだり、進行管理をしたり、専門的な知見をもって作品をかたちにする方たちです。加えて、デザイナーや建築家、法務の専門家といった、アートとまちづくりの間の領域で動く方々も多く、お互いに良い相乗効果が生まれる場にもなっています。

外へ広がる循環の拠点として

— STUDIOは空間として、どんなふうに育ってきましたか？

小森: ここは一貫して、運営側がサービスを提供するのではなく「お互いに何を持ち寄れるか」をフラットに考えられる空間を目指しています。日常的に席を並べ、知恵やケーススタディを共有し合うことで、横のつながりも広がってきました。プロジェクトを共にすることもあります。以前よりも物理的な距離が縮まったことで、影響し合う場面が増えている印象です。

金森: 様々な公募を通じて、初めてYAUに関わってくれる方も増えてきました。YAUは「アート×ビジネス」を軸に展開していますが、同時に、アーティストやアートの現場で働く人々にとってのプラットフォームとしても育ち始めていると感じています。ここで生まれた関係性や実践が外へと広がり、新たな活動へとつながっていく。その循環の拠点となれていることは、これまで活動を続けてきた中でも嬉しく感じていることの一つです。

小森: YAUの中だけでも、公募も、参加型プログラムも、講座もあるので、何かを入り口に違うところに動いていく方もいる。一つの活動の起点になりつつあると感じます。まちづくりの一環として、社会の役割上のつながりだけでなく、小さい単位のつながりを生み出す場であれたらいいと考えています。



YAU公募

デザイン: 三重野龍 (p12も同様)

YAU STUDIOとYAU公募

YAUメンバーと利用者の拠点であるYAU STUDIOでは日常的なプログラムを常時運用中。左ページにも掲出した3つのプログラム(いずれも利用料は無料)と、「YAUまちなか公募」は公募の取り組み。募集時には、YAUのホームページより応募いただけます。詳しくは「INFORMATION」ページも参照ください。

街に開かれる「YAU CENTER ぜにがめ」の試み



森純平（建築家）
空間設計とプロジェクト全般
のコンセプト担当



小山泰介（写真家）
ビジュアルアート担当



小森あや（アートマネージャー）
スタジオ運営、Y-base、
YAU ARTIST STUDIO 担当

オフィス街の稽古場であり プリントセンターであるという挑戦

— YAU CENTER ぜにがめは、どんな場所なのでしょうか？

森：YAU STUDIO が移転に伴いコンパクトになった際、より街に開かれた「出島」のような場所が必要だと考えていました。その課題感もあって生まれました。設計コンセプトはYAUの全拠点に共通する「『何が起こるかよく分からない』を設計する」こと。舞台の稽古や実験的な制作プロジェクト、展覧会など、異なる状況が心地よく同居することを目指しています。下水道にまつわるリサーチプロジェクトも進んでいて、この場所ならではの特性がさっそく発揮されている印象です。

— 2025年度は、具体的にどのようなプロジェクトが展開されたのでしょうか？

小森：柱の一つが、稽古場プログラム「Y-base」。オフィス街の一角で演劇やダンスの稽古が繰り返される、YAUならではの光景が生まれています。場所の都合で利用時間が夕方以降になったこともあり、以前より募集の幅を広げ、キッチンを利用した料理の会や、研究者や学生による読書会など、舞台芸術の周辺の方たちにも利用いただいています。



大手町の“出島”の営みとして

— この場の魅力が徐々に育っている印象です。

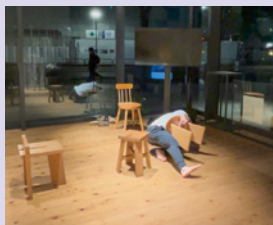
小山：加えてもう一つが、ビジュアルアートの分野でもY-baseのような練習の場を提供したいという思いで始動した「PRINT HOUSE」でした。期間限定でこの場所をコピーセンターのように開放し、アーティストがプリンターやコピー機を自由に使って制作をする場としました。今はYAU STUDIO内の「Y-LAB」という取り組みになりましたが、作家同士が話しながら作業を進め、交流や発見が次々と生まれていましたね。



— 2026年度はどのように展開していくのでしょうか。

小山：YAUの企画は前例のないものばかりですが、試行錯誤を重ねながら、この街らしい動きができるようになってきました。より街に開かれた場所となれるよう、僕ら自身がこの状況を楽しみながらチャレンジを続けていきます。

小森：都市のオフィスビルで稽古や制作を行うのは、本来はとても不思議なこと。でも、この状態があることで、関わる人たちの感覚が少しだけ自由になる。そんな場所であり続けることが、YAUのアートアーバニズムの実践なのだと思います。



YAU CENTER ぜにがめ

2025年10月、東京駅近郊の銭瓶町ビルディングにオープン。アートギャラリー「CADAN 大手町」と隣接するガラス張りの空間はオフィス街の日常にアートが混ざり合う場となっている。キッチンも活かした実験的なイベント「pump」なども行っている。

「YAU LEARNING」は、学び合いの渦？



深井厚志（編集者）
プログラム統括



東海林慎太郎（アートマネージャー）
プログラム設計



栗田結夏（アートコーディネーター）
プロジェクト実務・運営

肩書きを外して、アーティストの思考に触れる

— ラーニングプログラムがYAU LEARNINGという一貫した枠組みになりました。その特徴は何でしょうか？

深井：アーティストが街にいて「教える」のではなく「共に学ぶ合う」プログラムは、YAU 立ち上げ時からの自然な流れでした。レクチャー形式に留まらないこと、パフォーミングアーツを積極的に取り入れることなど、既存のプログラムではあまり見られない、ジャンル横断的な場を目指しています。

東海林：「共に学ぶ合う」ということが私の中で具体的に立ち上がってきたのは「有楽町藝大キャンパス」からでしたね。ビジネスパーソンと藝大生が協働して一つのテーマに向き合う姿に可能性を感じました。

深井：方向性を決定づけたのが、演出家・劇作家の松井周さんとの「標本転生」。アーティストがどのように物事を見て、考え、どんな言葉を発するのかというプロセスに長い時間をかけて触

れる。そこに本質的な学びがあると思います。

東海林：様々なプログラムが並行して続くなかで、参加者の関心のベクトルが共鳴するのを感じて。そこでYAU LEARNINGという大きな“傘”を立てて、より大きな循環をイメージできるようになりました。



正解を求めず、共に“ぐるぐる”と考える場

— 続けてきて感じることはあるでしょうか。

栗田：多彩な受講者の方から、運営側も気づきももらっています。たとえば“理系”の会社員だという方。当初はアートとの距離感を感じていたそうなのですが、コンテンツボラリーアートのコンセプト（文脈）について知ることによって「社会や歴史をふまえた概念なら理解しやすいし、初めてアートが面白いと思った」と。そんなふうに、アートの考え方や視点に触れ、新しい発見を得たという声をいただきます。この場をきっかけに新しい仕事に転向した方もいますね。



東海林：ビジュアルのイメージにしたように、ここは渦のような場で、入口も出口もたくさんあります。日々モヤモヤと考え続けていることを持ち寄り、アーティストや講師にぶつけたり、一緒に考えたりすることで、発見が生まれると思っています。

栗田：「アートと社会をつなぐ講座」で山本浩貴さんが話した「わからないものを、わからないまま楽しむ」という言葉が、YAU 自体のあり方にも重なります。何につながるか即座に結論を出さず、予定調和を崩してみる。アートは、その楽しみ方も教えてくれるはずですよ。



YAU LEARNING

2022年のYAU 発足以来、アーティストとのワークショップや、東京都・東京藝術大学との連携講座など、ジャンルを横断しながら拡張を続けてきたラーニングプログラムは、2025年度にYAU LEARNINGという枠組みに。「アートと社会をつなぐ講座」をはじめ、現在進行形で学びの場を生み出している。詳しくは「LEARNING」ページも参照ください。

DATA

数字で見るYAU

来場者数

35,718人

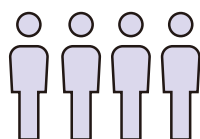


2025年4月～2026年3月
2024年4月～2025年3月
2023年4月～2024年3月
2022年2月～2023年3月

9,014人 15,139人 8,018人 3,547人

参加アーティスト数

2025年
521人



2024年 2023年 2022年

426人 373人 306人

Y-base※1

利用者数※2

採択数／応募団体数※2

469人 52組／257組

2025年 7組／35組

2024年 20組／104組

2023年 11組／41組

2022年 14組／77組

総イベント数

446回



2025年 179回

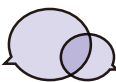
2024年 148回

2023年 74回

2022年 45回

YAU SALON来場者数

1,527人



2025年 418人

2024年 363人

2023年 444人

2022年 302人

※1 Y-base：YAUを使った稽古場プロジェクト ※2 2022年以降の総数

関係組織

団体・企業・個人

2025年 247組／人

2024年 162組／人

2023年 88組／人

2022年 36組／人

プロジェクトパートナー

2025年 26団体

2024年 13団体

2023年 9団体

2022年 8団体

官公庁・行政等

2025年 31団体

2024年 25団体

2023年 13団体

2022年 7団体

※2023年以降の数値は積み上げです

広報

メルマガ登録者数

2025年 1,378人

2024年 1,132人

2023年 886人

2022年 236人



Instagramフォロワー数

2025年 4,844人

2024年 2,959人

2023年 1,750人

2022年 722人



POSTS

「YAUユーザー」たちから



池田真実さん
(戦略コンサルタント)

オフィス街の広場であり、図工室であり、秘密基地

今は有楽町藝大でアートリサーチの授業を受講しています。理系出身だからか、美大のような空気が新鮮で刺激を受けています。YAUにかかわって気づいたのが、自分が「先読みと逆算の自動運転モード」になっていたということ。

そうではなく「問いを問いのまま持ち続ける」ことに向き合えた。YAUは、安心してそれが実践できる場です。

YAUとの接点：InstagramでYAUを知り、劇作家・松井周による「大丸有標本室」に惹かれて参加。コワークも利用。

“同じ時間と異なる意見”を共有するプラットフォーム

コワーキング利用などを通じてYAUで過ごしているうちに、スタジオの空間づくりにも建築家として関わることになりました。この場でさまざまなジャンルの活動をされる方と話す機会が増えた経験から、交流・発信がしやすいプラットフォーム

としての空間設計を目指しました。ものづくりにたずさわる人の社会に対する想いや、それぞれに抱える課題などを共有しあえる場があるのは貴重です。

YAUとの接点：都市のリサーチを軸に活動する中で、「有楽町藝大」に興味をもって受講後、コワークを利用。



石黒昌平さん
(建築家)



西井夕紀子さん
(作曲家)

自分の中に風が通るような感覚

閉館直前の国際ビルで、YAUの滞在制作でつくった小曲集をライブで演奏したとき、通り過ぎる方たちと、この場への思いを不思議と共有できた感覚がありました。ここは、普段接点のない職業の方や学生の方とゆるやかにつながりなが

ら自分を見つめ直せる場。今も有楽町藝大で受講していますが、アートの文脈で音楽がどのように存在できるか、考えている最中です。

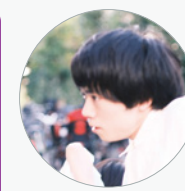
YAUとの接点：舞台作品の音楽制作を行っており、知人がY-baseに滞在していたのがきっかけでY-baseに応募。

大丸有の隙間から“財産”を蓄積していく場

ここは仕事帰りにふらっと寄って創作や色々な方との集まりができる、ありがたい居場所。会社では経済という抽象度の高い活動に専心していますが、ダンスは身体という具体的な媒体を通して、世界と新鮮に出会い直すきっかけを与えてくれる。

だから都市での居方や他者との在り方を、ダンスを通じて探求したい、それが滞在制作の生活を経て得られた目標です。

YAUとの接点：仲通りにある会社で働きながら、表現にたずさわる。YAU CENTER ぜにがめでのY-baseで滞在制作を行う。



井上哲さん
(俳優、ダンサー、会社員)

このエリアならではの存在に育ってきた

YAUのアーティストから生まれる活動は、このエリアの方々を巻き込みながら広がり、関わる人も多様になってきました。人と人とが有機的につながりながら、さまざまなYAUの入口が生まれているように感じます。一見すると少し入りにくく見えるかもし

れませんが、根底には常に「誰でもウェルカム」という姿勢がある。開かれた、このエリアならではの豊かな土壌ができてきているのかもしれない。

YAUとの接点：ビデオグラファーとして、YAUの立ち上げ当初から現在に至るまでの活動を映像で記録している。



金巻勲さん
(ビデオグラファー)

YAU HISTORY

タイムライン 2022-2026

2022 2023 2024 2025 2026

2022.2-5

①有楽町ビル10Fに スタジオを設置

「ビジネス街にアーティストの居場所をつくる」ための、4ヶ月間のパイロットプログラム。アートのプラットフォームを構築しました。



2022.10-2023.10

②有楽町ビルでの 再始動

東京都との共同事業をはじめ、企業・大学・自治体との連携構築を模索。定期イベント「YAU SALON」もスタートしました。



2023.11-2025.3

③国際ビルで 二拠点展開

有楽町ビルの閉館に伴い移転。路面区画を活用し「YAU CENTER」もオープン。活動を拡張しながら、街とアートの接点を増やしていきました。



2025.4-

④北有楽ビル1Fに 引越し!

国際ビル閉館により、有楽町駅に近い北有楽ビルへと引越し。「アートアーバニズム」のさらなる継続・実践をテーマに、新たなスタジオでの活動を始めました。



2025.10-

⑤大手町に新たな 拠点をオープン!

銭瓶町ビルディングにて「YAU CENTER ぜにがめ」をオープン。二拠点での展開により、新たな隣接するエリアへと活動を拡張していきます。



Google Earth より作成 Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO Landsat / Copernicus

INFORMATION

YAU 公式 WEB

<https://arturbanism.jp/>

お問い合わせ・
公募や受講のお申込みはこちらまで

YAU for BUSINESS

<https://arturbanism.jp/business/>

ACCESS

YAU STUDIO

東京都中央区銀座一丁目3番先
東京高速道路北有楽ビル1階 16号室

YAU CENTER ぜにがめ

東京都千代田区大手町2丁目6-3
銭瓶町ビルディング 1階 ぜにがめプレイス内

MEDIA

Link tree
このリンクから、
各ページへ



YAUの活動、日常の様子をお届け!



「YAU 編集室」による、
YAUを記録し考えるメディア。

note

〈YAU〉

主催:「有楽町アートアーバニズム」実行委員会(NPO法人 大丸有エリアマネジメント協会、一般社団法人 大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会、三菱地所株式会社)

共催:東京都(一部プログラムを共同事業として実施)

企画・運営:YAU プロジェクトチーム

深井厚志、森純平、小山泰介(TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH)、武田知也(bench)、藤井さゆり(bench)、東海林慎太郎、金森千紘、小森あや(bench)、山本さくら、村松里実、佐藤瞳、築山礁太(TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH)、武田花、栗田結夏、黒須莉菜

合同会社 TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH、一般社団法人ベンチ、株式会社フロントヤード

助成:国土交通省

〈YAU2025年度の報告書〉

企画:小森あや(YAU)、武田花(YAU)

編集:大澤景

編集協力:裏谷文野(p.14-15)

デザイン:ヤング荘

写真:Akinori Tanaka、石黒昌平、板倉勇人、加藤甫、Kana Anzai、黒田菜月、築山礁太、中川周、中川陽介、藤島亮、マコトオカザキ、三野新、

水落雅周、森本純、GC magazine、TIB、TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH、Tokyo Tender Table

発行:2026年7月



